

寸言

株式会社IHIエアロスペース
代表取締役社長
石井 潔



IA設立10年に思うこと

弊社は、この7月1日をもって、設立10周年を迎えます。2000年7月、日産自動車の防衛宇宙事業を継承しIHIエアロスペース社（IA）が発足、その後IHIの宇宙事業部門の大半が弊社に統合され、現在の姿に至っております。昨年7月、国際宇宙ステーション（ISS）の日本実験棟「きぼう」の船外実験プラットフォーム、船外パレットがスペースシャトルによって打上げられました。これらは、統合前より、前者はIHI、後者は日産でそれぞれ開発が行われ、事業統合後は、弊社とともに開発作業が進められてきました。IA発足10年目にして、無事一緒に上げられ、「きぼう」の完成に寄与できたことは、両者の事業統合の象徴として大変うれしく思いました。

昨年は、それに引き続きISSへの補給機であるHTVも、HII Bロケットにより上げられ、完璧にミッションを遂行、日本の宇宙関連技術の国際的認知度も大幅に上がりました。これらの事業に参画した弊社にとっても、また日本の宇宙産業界全体にとっても、極めて意義深い年となりました。こうした成果に加え、国レベルで宇宙基本計画も策定され、今、日本の宇宙産業は、将来を左右する重要な節目に立ち至っているものと認識しております。

この2月に経済産業省、SJAC合同の宇宙産業アフリカミッションに団長として参加する機会をいただきました。エジプトと南アフリカの2カ国を訪問して参りましたが、両国とも宇宙分野新興国としてこれから大

いにやっけて行くぞという意気込み、元気さを感じてきました。エジプトはそれこそ5000年の歴史を有する国ですが、現在、自国の科学技術力強化に大いに力を入れており、海外からの技術も積極的に吸収しようとする、若さを逆に感じてきました。日本が明治になって欧米からの技術を積極的に導入し、一気に近代化が進んでいったあの元気さに似ているかもしれません。

弊社の事業所がある群馬県富岡市には、かの有名な富岡製糸場があります。ここは、開国後間もない明治5年、政府が産業近代化推進の一環としてフランスの技術を導入して設立された工場です。すでにその役割は終え、現在は当時の建造物をそのまま残す史跡となっていますが、今日の日本の産業成長の礎を築いたこの富岡市内に、いわば技術の先端とも言われる宇宙事業を手がけている私どもの工場があるというのも不思議な気がします。明治のはじめに先進諸国に追いつこうと国として西洋文明を取り込み、今日に至るまで140年の間に、官・民双方、どれだけ多くの方たちが日本の産業育成のために努力されてきたか、そういう歴史の延長線上に、現在の私どもの事業も成り立っていることを改めて認識させられます。日本の宇宙事業にとり重要な岐路にある今、現在を生きる者の責任を少しでも果たすべく、50年、100年後につながる元気ある挑戦を是非とも続けてゆきたいものと、IA設立10周年を前に自省とともに思うこの頃です。